©海事プレス社2026　禁無断転載

AIで貨物の「待ち時間」削減

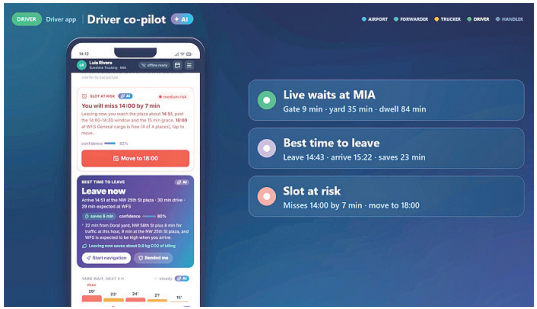
■マイアミ空港、情報共有基盤を導入

米マイアミ国際空港は27日、人工知能（AI）を活用した空港貨物コミュニティーシステム（ACCS）の導入を発表した。同空港によると、AI活用型プラットフォームを導入した貨物空港としては世界最大となる。フォワーダーや航空会社、貨物ハンドリング会社、トラック事業者などを共通のオンライン基盤でつなぎ、情報共有やトラックの到着管理を効率化する。空港全体に利用が広がれば、航空貨物サプライチェーンで年間最大2億5000万ドル（約395億円）の業務コスト削減につながると見込む。

システムはインドのIT企業Kaleが開発した。10月26～29日にマイアミで開催の国際航空貨物協会（TIACA）の「エアカーゴフォーラム」でマイアミ空港が発表した。

同空港では現在、到着時刻や貨物の種類に関する情報が十分に共有されないままトラックが到着し、混雑や待機、排出量増加につながっている。ACCSを通じて、各社が個別に手作業でやり取りしていた情報を一元化する。事前計画やトラックの到着スケジュール管理を改善し、待機時間の短縮と貨物業務全体の生産性向上を図る。

2025年の貨物取扱量は過去最高の340万米トン（約308万トン）だった。貨物輸送を支える貨物専用便は1日平均190便、トラック輸送は1600回超に上る。



マイアミ空港のACCS画面

空港の貨物関係者全体が導入した場合、年間5900米トン（約5350トン）の二酸化炭素（CO_2）排出を削減できると試算する。紙書類の取り扱いを15%減らし、トラックの入場から退場までの所要時間を平均2時間短縮することが前提。また、樹木3000本分に相当する紙資源の節約も見込む。

今後は海外の提携空港とも同システムを通じて情報を共有し、空港間の貨物輸送を円滑化する方針だ。